

1. 巻頭言

Privacy と Security

学長 池田高良

総合情報処理センターは、昭和45年に工学部におかれた全学共同利用の「電子計算室」として始まり、その後学内措置により「情報処理センター」となり、昭和63年に省令施設として現在の「総合情報処理センター」へと発展して来ました。本センターのこのような発展は喜ばしいことであり、これまでセンターの発展と運営にご尽力くださった関係各位に心より感謝の念と敬意を表します。

さて、現代社会は、まさに情報社会であり情報過多の状況にあると言えます。情報とは、センターの生い立ちが示すように当初は計算的側面をもつものが主たるものでした。しかし、現在は生物・知能的側面と社会・コミュニケーション的側面をもつものが「情報」に加えられるようになり、まさに世の中の全ての知識、知恵の基本単位が情報として取り扱われるようになりました。すなわち、理工系のみならず生命科学や人文社会学の分野においても情報が日常の仕事の対象となり、さらには家庭生活の中でさえ情報がはんらんする状況になって来ています。ところで、生命科学の分野においては、遺伝子情報の解析が盛んに行われています。21世紀初頭には、ヒト染色体上にある遺伝子構造の全てが解明されると予測されています。解明された遺伝子構造に関する情報は、公的に認知された情報として登録され、全世界の研究者が利用することになると思います。言いかえると、各人の遺伝子構造を調べることが可能になると言うことです。このような時代は目前にあります。Privacy の問題が危惧されるころですが、悪用されると人類の選別というコワイ問題さえ起こりかねません。生命科学分野の情報の一例をあげましたが、情報を扱う場合にはPrivacy の保護を常に念頭におく必要があります。この様に情報の分野が拡大するとともに、情報の質の多様化が起こります。その際とくに留意すべきことは開示、不開示情報の判別です。不開示情報は当然保護手段を講じる必要がありますが、保管している情報を盗もうとしたり、抹殺したり、また故意に変更したりするような悪質な人や愉快犯が増えていることも知っておかなければなりません。Security の問題です。わが国の情報管理は、非常にルーズであると言われています。これも平和ボケゆえでしょうか。情報処理に関する Privacy の保護と Security の問題は情報を取り扱う者の義務であり責任であると思います。本学においても全ての学生が情報科学の教育を受けています。教育研究の効率を上げるために必要なものですが、情報処理における倫理問題、不利益、欠点などマイナス面についても理解しておくことが大切です。情報は無味乾燥で冷たいものではなく、生き物で暖かいものです。それゆえにヒトに人格があるように、情報にも「格」があるのです。情報の取り扱いは大切にしたいものです。

総合情報処理センターの更なる発展を期待しています。